

ものにはすべて裏表がある、ということ  
は年をとるにしたがつてわかってきた。し  
かし、わかればわかるほど不愉快になつた  
り、腹が立ったりすることばかりで、これ  
は長生きの不幸のひとつに数えられよう。

表ばかりで裏なんか無い、とばかり信じて  
いた法律や憲法にも裏があるということ  
だが、こういうのはうかつ者とかお

ひとよしといつてほめられ、裏道を  
歩く人間は頭がいいとほめられる。

道路に限って表通りのほうが歩きや  
すく、裏道はドロコで困るが、人  
生の行路にあつては裏道のほうが歩  
きやすいという話だ。

家ならば玄関口のあるほうが表で  
台所からの口のあるほうが裏だ。人  
間なら、ヘソのついているほうが表と  
いうことになっている。しかし、人  
間にも高貴な人間の女性に限り、裏  
方というのがあるが、これはあまり  
上品に聞こえる呼び方ではない。裏  
方は、どうも台所に近い。

話にも裏話というのがある。どちらがほん  
とうかということになると、裏話のほう  
が真実の場合が多いらしいから、どうもこ  
うなると、裏も表もわからなくなる。しか  
し人間というのは、裏をのぞいてみたい共  
通心理があるそうだが、ある僕の知人が、

「はだかになつてもめつたに見られない、  
女性の肉体の一部の太うつし」なんていう  
広告にワクワクして、注文して送られた写  
真は、足の裏だけの太うつしだったとか。  
最初から話が落語めいて、横道にそれて  
大變申しわけない。このあたりで表のほう  
に話をもどそう。

## 日高山脈の裏表

坂本直行



けもない、いやな名称がいつのまにか生ま  
れてきた。別に地名や山名がないわけでも  
ないのに、こういう悪趣味が横行する。  
ところで僕は三十五年間、南十勝の原野  
に生活して、延々とつらなる壮麗な日高山  
脈を眺めて暮したが、その間にその姿を描  
いたデッサンは何千か何万か覚えはないが

僕のいた十勝側を以て表というならば  
裏口の日高側からの姿を、ぜひのぞいてみ  
たいというのは、自然の心理だろうが、こ  
ういうチャンスは不幸にしてなかなかめぐ  
つてこなかった。むしろ十勝側の展望のよ  
うに、野性的な原野の上に、一望のうちこ  
つらなる山なみ、というのは見られないこ  
とぐらいはわかつているが、数本の  
大きな川の谷合いからは、カットシ  
ーンぐらいいのぞめるだろうと思っ  
ていた。

古 山 丸 大 町 尾 広

四、五年前の晩秋、日高山脈の後  
姿、つまり裏口をのぞくチャンスが  
きた。僕は、スケッチブックをズダ  
袋に入れ、胸をワクワクさせて家  
を出た。別に日高山脈に裏表があるわ  
けではないが、いつも眺めてるほう  
をタイトルの関係で表といつたまで  
で、早い話が——惚れた女の後姿を  
一目見たい——というわけである。

天気は上々だった。庶野と歌笛間  
のバスから見える、日高山脈の最南端のオ  
キシマップや豊似岳の姿は、なかなかすば  
らしく、早春サンマースキーで歩く山のひ  
とつとして、僕のプランの中に加えられた  
のはむろんである。

三十年前に登ったアポイ岳もなつかしか  
った。僕の好きな地名であり、まことに気

いったい山に裏表というのがあるだろう  
か、というと、まさしくそれはある。よく  
何々山の表口だとか、裏口だとかいうこと  
を耳にする。北海道にだって立派にある。  
僕らの知らないうちに何人の発案かわから  
ないが、裏大雪という、まことに味もそつ

まだ一度も飽きたことがないのは、やはり  
自然というもののありがたさというべきだ  
ろう。だが、居住地の位置や、時間、旅費  
の関係で、いつも十勝側から登山して、十  
勝側にばかり下っていたので、日高側から  
の日高山脈の姿は一度も拝んだことがな  
かった。



道内唯一の双峰 オムシャブリ

分のよい印象をうけたかつての冬島（プロシユマ）は、すっかり姿を変えていて、さびしい気持がした。

バスが様子に着くと、南日高の秀峰・楽

古岳を中心とする山なみが、目に飛びこんできた。僕はこのときはじめに日高山脈の後姿を見たのだが、そのよろこびは大きかった。楽古岳は、朝夕眺めたいちばん親し

い山であるが、そのツンと尖った頂は、裏から見ても予想したように、その後姿も美しく魅力に変わりはなかった。

しかし、その西隣りの十勝岳（五万分の一地図楽古岳にあり）は、かつてアイヌ人が呼んだポロシリの名にふさわしい姿で、僕をおどろかせた。

楽古岳は古い地図にはオムシャブリとなつてはいるが、シャモのように無意味な地名の変更をやらない彼らが、ラッコというまたの名をつけた理由については、それにふさわしい理由があるが、オムシャと命名した後に、十勝側の原野に壮烈な野火があつて、ラッコ川で野火が食い止められたという語源を考えると、何も不自然ではない。あるいはまた、楽古岳の頂が、見る方角によつて頂近くに、もうひとつのコブがあることに起因するのかもしれない。

僕が耳にしたオムシャの語源は、アイヌの男女が出会ったときに、お互いに示す挨拶を意味するそうだから、山容からいって複数でなければならぬはずである。それがいつラッコの名称に置き換えられたかは僕の知るところではない。

ところでオムシャなる山名は、これで永久に捨て去られたわけではなく、現在では野塚川上流の、僕の大好きな、道内では唯一の美しい双峰、一三七メートルと一三

二〇に与えられている。最近の日高山脈の無名峰の一部に、適切な名称が与えられているのはよろこぶべきことだが、これは北大の橋本誠二君たちの努力によるものである。表に現れない話は裏話ともいうらしいが、こんな裏話ならたくさんあったほうがよろしい。

楽古岳の標高は現在一四七二、二メートルとなつてはいるが、僕が所持している北海道詳図（六十万分の一、大阪日本精版印刷合資会社印行とあるだけで、出版年月その他はいつさい記されていないが、非常に精密で立派な地図）には、楽古岳の標高は一四一四メートルになつてはいる。どちらの標高も正しいとすれば、五、六十年の間に、楽古岳は五八メートルばかりオガツたことになるが、もしそうならばうれしいことで、昔、有珠山にあったオガリ山のように、楽古岳にもオガリ山のニックネームを捧げてもわるくはない。

またもヤベンには裏道ならぬ権道にそれってしまったので、表道にもどらう。

様子から汽車に乗った僕の目は、車窓から離れなかつた。前山のかげからチラリと見える頂でも、僕にとつてはまことにうれしい山の後姿であつて——あいつは何々山だ——ということがピンとくる。



ケリマイ付近より神威岳、ソエマツ岳

僕は三石の駅で下車した。駅にはたしか僕の知人で、やはり自然を愛する美しい日嬢が迎えにきているはずだったが、約束どおりそこには美しい日嬢の笑顔が、僕を待

っていた。翌日、僕は日嬢と自転車に乗って起伏する丘陵を、あるいは坦々とした道を一日中走りまわった。むろん壮麗な、白雪をいた

だいた南日高の連峰が二人を狂喜させた。

ケリマイからの、神威岳を中心とするカムイエクウチカウシまでの山なみは、圧巻だった。特に、山脈が日高側に曲がっているため、十勝側からあまり全貌を見せない神威岳の俊烈な山容は大きな魅力だった。

夕刻、空気がつめたくなる頃、汗をかい二人は飲食店に飛びこみ、乾杯したビールの味は世界一だった。スケッチブックを山の姿でビッシリうずめた二人の足は重かったが、心はよるこびで軽かった。

こんな旅に味をしめた僕は、そのつぎの年の初冬、ふたたび画板をかついで富川からバスに乗り、貫気別にいった。日高ポロシリの裏をのぞくためである。暗れ男の僕に悪天候はない。この日も快晴無風で、僕は飽きるほどポロシリをシリのほうから眺めたり描いたりした。翌日はまた汽車に乗ったり降りたりして描き歩いたが、静内は山が遠くてあまり結構でなかったが、厚賀では予想以上の展望にぶつかり、多忙な目があった。

ここからは日高ポロシリはむろんのことまだ下界から拝んだことがない、イドンナップの、それも後姿を見ることができた。この山は残念ながら、前を絶対に見せない山であって、おそらく道内の山では（小さい山は別として）下界からはめったに拝め

ない名山であろう。かつては、石狩岳がそ

ういわれた時代があったが、今では十勝三股にゆけば、簡単にその全貌を見られる。しかしその原因の一部には十五号台風が密林をなぎ倒した功績もむろんあるのだが。

僕は日高山脈の裏表は、これで見えてしまったわけだが、表と裏のどちらがよいか、ということになると、それは三十五年間眺めた十勝側の、いわば表のほうがよい。それは地形からくる景観の差であって、我田引水ではない。

日高山脈の裏面の話は紙数がないのでこれで終りにするが、この機会にぜひ書き添えたいことがひとつある。

昨年十二月頃だと記憶するが、日高山脈を「北海アルプス」と改名する話がどこからか出てきた。それを耳にした僕の腹の虫は、おだやかでいられるはずもないでいたところ、北海タイムスからそれについてのアンケートを求められたことがあった。そのときはじめて、改名案の震源地がわかった。それは十勝支庁と、十勝観光協会という話だった。

いったい、地名というものは（山名も同様）そう簡単に生まれたものではないはずである。いわば先住者たちの、長年にわたる生活の中から生まれたものであって、決

して、無意味につけられたものではあるまい。そうであるとすれば、これはいま消えてしまう危険をはらむ自然の美しさと同様、地名も僕たちが祖先から受け継いだ貴重な遺産のひとつとして考えなければならぬ。

僕たちにはまた、それを大切に伝承して次の世代に引き渡してゆく義務があると信ずる。こんな簡単明瞭な、もつとも素朴な愛郷心の一部すら、どこかえ捨て去っている人間が、官庁の中にもいるということなんとも情けないことである。

狩勝峠を十勝へ越したところに、昔佐念頃(さねんころ)という駅があった。そのひびきが、どうもおだやかでないという理由からだと思うが、御影(みかげ)に改名した。また昔、旭川と美瑛の中間に辺別という駅があった。それについてこっけいな話を僕が開拓生活をはじめた当時間聞いた。

内地から辺別に移住した娘さんが、無事到着したので、親元へ「ベベツツイタスグカネオクレ」と打電したところ、親はびっくり仰天して、金を送ったということだ。

僕の所持している昭和二年の二十万分の一地図には、まだ辺別の駅名はあるが、今の汽車の時間表を見ると、この駅名はない。まあこんなのは、立派に改名の理由がある。

しかし、北海アルプスにいたっては、観

光をだしにした金もうけにつながっていることは誰の目にも明瞭である。そのときの新聞紙には、改名派の先人の意見が出ていたが「日高山脈というが、いったい日高側の人たちは、日高山脈の宣伝に何をやったか、何もやっておらんじゃないか」というのである。これが、日高の山肌にさわったことすらない人間のいいぶんである。これは笑うべきナワ張り根性の現われである。

ここで裏話をいえば、日高山脈を、今日のように全国に知らしめたのは、北大山岳部員を主とする一般登山者以外にはないはずである。その間には、四十年の登山者のたゆみない歴史がひそんでいる。

なんでもブーム時代だが、地名や町名の改悪がはやる。その結果は印刷屋がもうかるぐらいで、あとは近所迷惑である。観光地をまわってみればわかるが、一つの岩

一本の木、チョロチョロ水の滝にまで、実にくだらない名称をつけているが、正気の沙汰ではない。こんなのは感情的な、自然の破壊といえるだろう。迷惑するのは、観光客とバスガールである。

こんな筆法で、美しいひびきをもち、しかも意味をふくんだ、郷土的なユニークな地名や山名を、なんの反省もなく捨て去り改名したものにロクなものがないのは、無意味という以外に、歴史的な必然性がない

ためである。

最後に僕がいたいことは、このような思想こそ、自然を破壊する方向に導くと考へる。口に祖先崇拜や、愛郷心や愛国心を唱える人が、このようなことに無関心であるようにみえるのは、全く不可能である。改名だけで、町村が発展したり、観光客が集まるならばまことに結構である。

また、不思議でならないことがひとつある。登山者は、手帳にはさんだ一輪のコマクサでもとがめられるが、全国的に堂々と市販されている高山植物を見ると、どうもがてんがゆかない。たぶんこれも裏道のほうだろうが、僕には七不思議にみえる。先日、風運湖に白鳥見物にいったら、あそこはまだ禁猟区になっていないと聞いたが、これも不思議にみえる。

：

観光をだしに金もうけをする観光資本とそれにブレイキをかける仕事をする自然保護協会は、明らかに対立する。僕はかけがえない北海道の自然を、これ以上破壊されたくない熱望する一人として、観光資本と協会との間に、裏話なんか出てもらっては困ると心配するのだが、ものは裏と表をみる—とはいうが、自然に限り、裏がみえたそのときには、もう自然はそこにはない。

僕は、日高山脈の裏と表を、少なくとも現状のまま、いつまでもさん然と輝く姿で保存されるよう、ねがってやまないのだがそれには、現在ある以上に登山道路なんかつけないことだ。知床半島も同様だが、この以外に原始の姿を残している区域は、国内に絶無とすれば、ますますその必要性はあるだろう。

あるいはまた、世界に例がないといわれる、沢登りや、ヤブ漕ぎをして頂きに立つ登山技術を通じて、いつまでもつぎの世代の若者たちに、新鮮な原始にふれさせ、その価値を理解させ、かつまた、健康で清潔な道場として保存されなければならないと思う。

無計画に山を坊主にして、雨があれば洪水の洪水で、それを国民の善意を利用しての「みどりの羽根」運動なんていう裏話は絶対にくり返さないでほしいものだ。このへんでもういちど、お互いに、落ちかかったフンドシをしめなおそう。

(山岳画家)